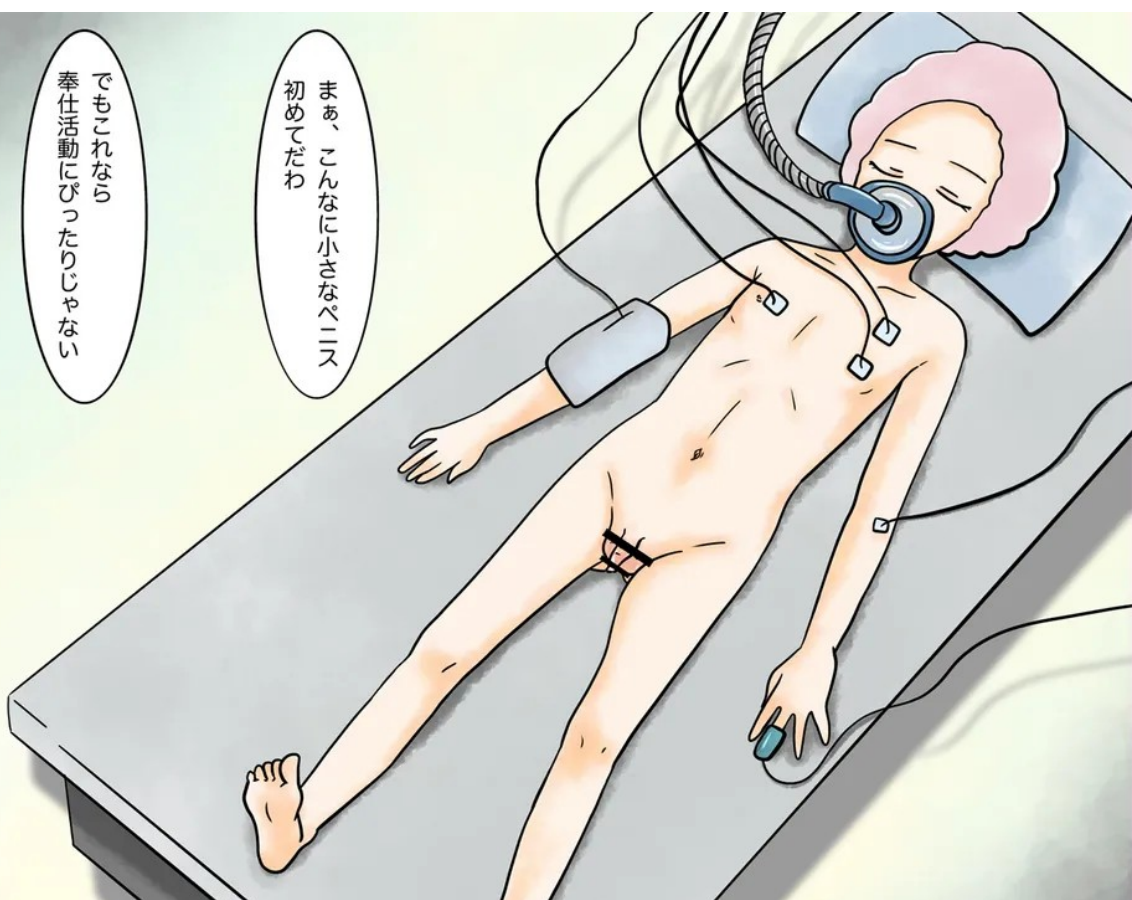




西野 色葉(にしの いろは)2×歳 男
20XX年XX月XX日 他人の住居に押し入り、女性住人の
下着を窃盗しようとした所を現行犯逮捕。
裁判の末、懲役三年の判決を受ける。
昨今厳しくなった性的犯罪の量刑とはいえ、三年は長すぎる。
彼は代替案として提案された三年間の「社会奉仕」の道を選んだ。

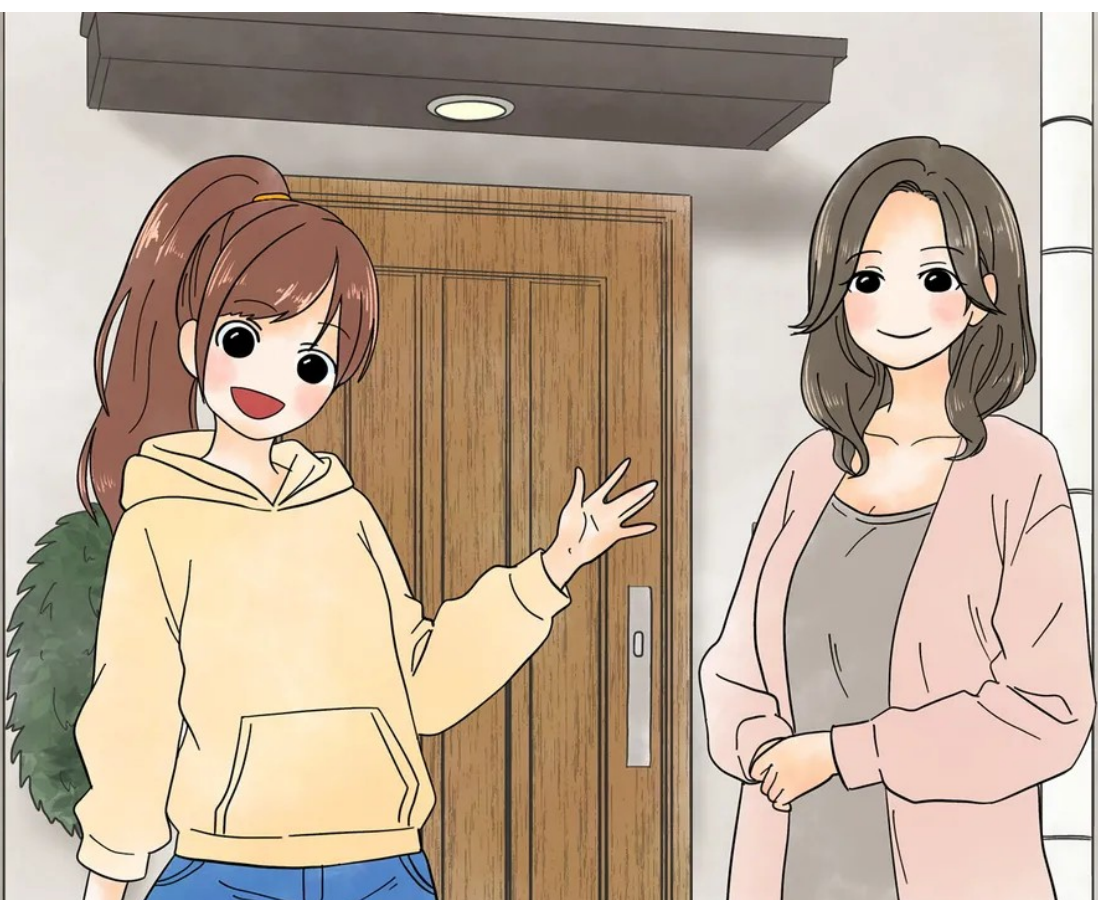
懲役と社会奉仕なら後者を選ぶのは当然だっただろう。色葉は数日後、その準備として全身麻酔の手術を受けさせられる事になった。医師の説明によると、刑期の間、性欲と筋力を抑える手術だという。その後、簡単な手続き後、色葉は早速奉仕先の家庭へと送られた。職員の説明によると、彼はとある家庭に望まれてその家族の一員となるらしい。



まあ、こんなに小さなペニス
初めてだわ

でもこれなら
奉仕活動にぴったりじゃない

てつきり清掃などのボランティアをすることになると
思っていた彼は面食らったが、疑似家族として普通に
暮らすだけならむしろ軽すぎる刑罰である。
出迎えたのはまだ小さな女の子とその母親だった。
話によると、虹崎優理というその少女が兄妹が欲しいと
母親にねだり、多数の応募による抽選の結果、この家庭
が見事「当選」したらしい。沢山の人に望まれていたと
いう事実を知り、色葉は悪い気はしなかった。



どうやら虹崎家には父親がいらないらしい。男性のいない家庭で、まだ小さな優理が父親代わりに兄を欲したのだと色葉は理解した。少し歳は離れているが、可愛い子だからむしろラッキーかもしれないと思いはじめた彼だったが、その妄想はすぐに瓦解する。

「色葉、どうして男の子みたいな服を着ているの」

「さあ、脱ぎ脱ぎしましょうね」

雛子と優理が訳の分からない事を言い、色葉の服をはぎ取り始めたのだ。

抗う色葉だったが、手足に力が入らず、女性二人に全く適わない。

「抵抗しても無駄よ。色葉ちゃんの筋力は小学校低学年並だから」

楽しそうに言う優理の言葉に、色葉は手術の意味を改めて悟った。

そして無理矢理着せられたのは信じられない下着だった。



「なんだよこの服！ 女の、それも子供用の下着じゃないか！」
精一杯の声で反抗する色葉だったが、雛子は冷静な声で言い返す。
「当然でしょ、あなたは今日から優理の妹になるんですから」

色葉は自分の勘違いに気づいて呆然とした。
優理が欲していたのは兄なんかじゃなく、妹の方だったのだ。
しかし何故男の自分を妹になんかしようとするのか。
理解が追いつかないまま雛子と優理は彼に恥ずかしい衣装を
強要する。
初めてのスカートに色葉はただただ屈辱を感じるだけだった。





「ここが色葉の部屋よ、お姉ちゃんと一緒だけど我慢してね」
案内されたのは、二階にある大きな子供部屋だった。
部屋には学習机とベッド、クローゼットなどの家具が左右に二つずつ。
「お姉ちゃんのお古だけど、色葉の机とベッドはこっちね。」
確かに真新しい優理の物と比べて、色葉に与えられた家具は
使用感が隠しきれなかった。
そして、優理のものがシックな雰囲気なのに対して、色葉の方は
いかにも小さな女の子が喜びそうなパステルカラーの可愛らしい
デザインの家具ばかりだ。姉のお古を使う妹。色葉は自分の置かれ
た立場を再確認して、ぞっと身を震わせた。

しかし、いくら刑罰とはいえ年頃の女の子と自分のような成人男性を同じ部屋で暮らさせても良いのだろうか。色葉は訝しがったが、先ほどの自分の情けないほどに衰えた筋力を思い出して納得した。小学生低学年並の力ではとてもこの少女を襲うことなど出来ない。逆に、屈辱的な服装を腕力によって強要されているのが現実なのだ。「さあ、色葉はまだ小さいんだから、もうおねんねしましょうね」そう言つて色葉が着替えさせられたのは、もちろん可愛らしい女兒用のパジャマだった。すぐ隣で宿題でもしているかのような優理の傍で、経験した事のない女兒パジャマの柔らかで優しい感触に包まれた色葉はなんだか落ち着かなく、なかなか寝付けなかった。





「色葉、起きなさい。遅刻するわよ」
翌朝、優理に起こされた色葉はしばらく状況が理解できなかった。
そうか自分は刑罰でこの家の娘になったのだ。そしてこの娘の妹に……。
思い出した途端、恥ずかしい思いが脳内を満ちた。
だがその時、そんな感情も吹き飛ばすほどの違和感を彼は下半身に感じた。
「あらら、色葉ったら、オネシヨしちやったの？」
気がつけばベッドのシーツはぐっしりと濡れていた。
「もう四年生なのに仕方無いわねえ」
（どうして！？ 今までこんな事一度も！）
勿論成人男性の彼に夜尿症の癖など無かった。
あまりの事態に当惑する色葉だったが、それが手術によって仕組まれた
作用だと思いつくまでにはいかなかった。

「ベッドはママが片付けておくから、学校の用意しなさい」
「すいません」

雛子に素で謝ってから色葉はその言葉の意味に気づく。

「が、学校!?!」

「色葉は私の妹なんだから当然でしょ」

そう、そういう立場なら色葉はまだ義務教育中に違いないのだ。

「今日のお洋服用意しておいたから、シャワーを浴びて

おしっこ綺麗にしてから着替えてきなさい」

もはや逆らう元気も無く、色葉は従うしか無かった。





う、うん…
ありがとう、お姉ちゃん…

お姉ちゃんのお古のランドセル嬉しい？

「ほ、本当に自分が△学校に通うんですか!？」
「当たり前でしょ。あなたはまだ四年生なのよ」
「で、でもそんな事許され……」
「全部手続き済みで学校の許可も取ってあるわ」
考えてみれば、今彼は奉仕活動としての生活を送っているのだ。戸籍を書き換えられるなら、学校に転入許可を取ることなど簡単なかもしれない。
「さあ、これもお姉ちゃんのお古だけだね」
背負わされたのは、△学生が登下校に使う背負い鞆。
そう、ランドセル。それも女の子用のピンク色のランドセルだった。
優理が六年間使ったというそれは、まだまだ新品同様にピカピカだったが、△学生の象徴のようなそれを成人男性の自分が背負わされるといのは恐ろしく抵抗があった。

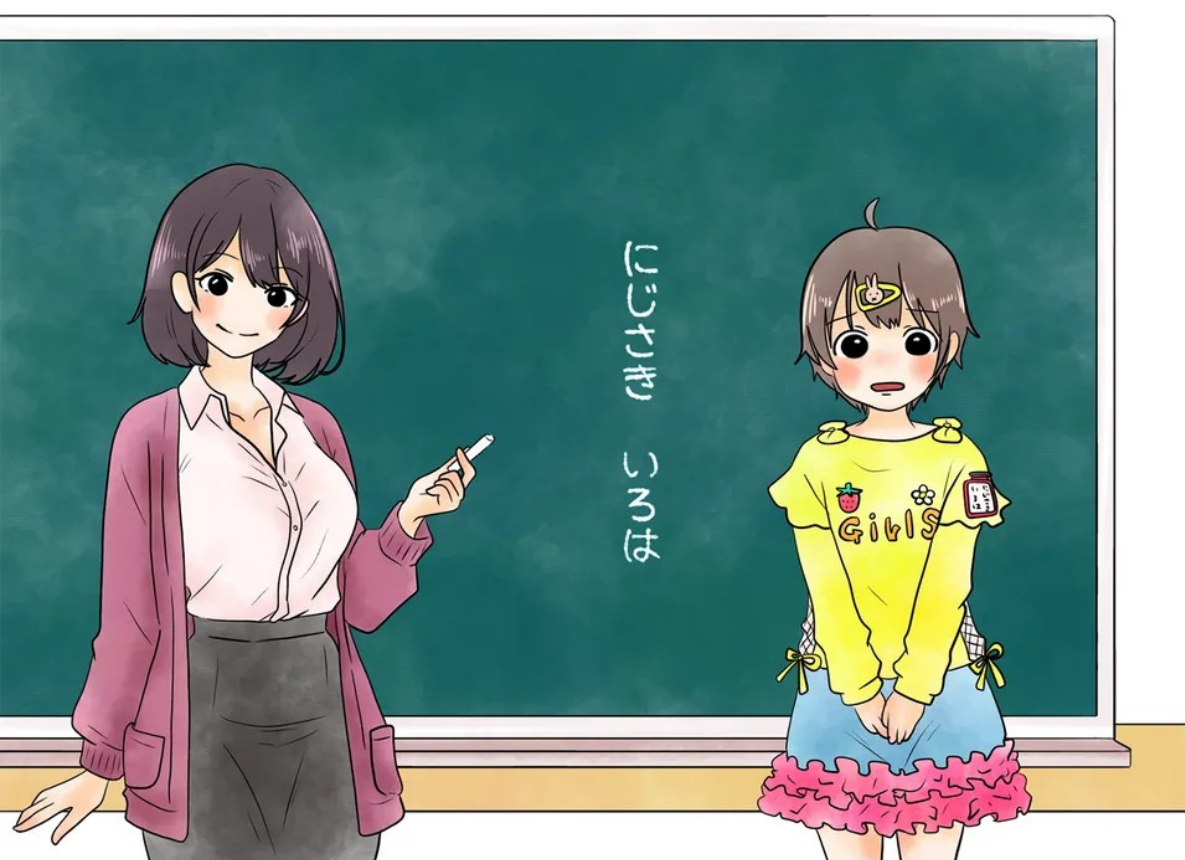


△学校と□学校はすぐ隣ということで、登校は優理と共にする事になった。

女兒服とランドセル姿で外に出るといふ背徳的な状況に色葉の頭は、パニック状態だった。

そして、今までは幼稚に見えていた優理の□学生の制服がとても大人っぽく見える。

自分は今、優理よりも小さい女の子のような格好で外を歩いているのだ。そう考えると色葉は顔を上げる事さえも出来なかった。



「色葉ちゃんは、みんなより少し大きいお兄さんですけど、悪い事をして落第してしまいました。これからはお友達として仲良くしてあげてね」
担任の女教師は何一つ隠すこと無く生徒達に色葉の事をそう説明した。
「どうして男の人なのに、女の子の服着てるの？」
「もう大きいのに私たちと同じクラスなんて、恥ずかしくないの？」
生徒たちの容赦ない質問に色葉は顔を赤くして俯くしかなかった。
担任が耳打ちする。
「おい、性犯罪者。この子達に少しでも手を出したら極刑だからね。まあ、今のあなたの腕力じゃ逆に虐められるかもしれないけど」

それからもう普通に色葉は四年生の女子生徒として扱われた。
その待遇は色葉を安心させたが、逆に酷く屈辱的なものでもあった。
十数年ぶりの算数の授業は当時から成績の悪かった色葉を困惑させ、彼が四年生の授業を受けるのに相応しい学力しか持つていない事を知らしめた。



恥辱の学校生活一日目を終え、ようやく帰宅しようとした色葉をクラスメイトの少女達が呼び止めた。

「虹崎さん、あなた性犯罪者なんでしょ」

「あたしたち、あなたと一緒にクラスなんて嫌なんだけど」

糾弾する言葉に色葉は「ごめんなさい」というしか無かった。



大体、男の癖にその格好なによ

今時、低学年でも
そんな幼稚な格好しないわよ

本当におちんちんついてるの？見せてよ

あつという間に色葉は手足を拘束され、スカートを捲られてしまった。

「や、やめ！」

不思議な事に「やめろ」とは言えない。服装に、発する言葉が引きずられているのだろうか。

「はい、お姉さん達がおちんちんチェックしてあげるねえ」

女兒パンツまでずり下ろされ、色葉はついに恥ずかしい悲鳴を上げた。

「やめてえっ!!！」

やだ、パンツまで女の子用はいてる！



なに、これがおちんちん、小っさ過ぎるでしょ！

これじゃあ女の子にされるのも仕方ないよねえ

翌日、またしてもオネシヨしてしまつた色葉は失意のまま登校した。

「今日も可愛いお洋服ね。趣味なの？」

クスクスと笑いながらからかつてくる同級生に色葉は返す言葉も無い。

「あなたのお姉さん、虹崎優理さんなんだって、羨ましいなあ」

どうやら優理は成績優秀で有名ならしい。

「お姉さんの名を汚さないように、可愛い妹でいなくちゃね」

そう言われて、色葉は改めて自分の立場を思い知らされた。

今日も低学年みたいなの

可愛いお洋服似合ってるよ

成人のお兄さんなのに、

幼稚な服恥ずかしく無いの？



優理さんがお姉ちゃんってどんな感じ？

年下の子をお姉ちゃんって呼んでるのお？



そして色葉はその日も帰り際にいじめっ子達に捕まった。

「もう来なくていいって言ったよね」

「なんだよその服、わたし可愛いでしょ、アピールなの？」

「二度と学校来れなくしてやるよ」

あつという間に色葉は昨日と同じ様にパンツを下ろされ、露出したペニスを摘まれてしまった。

「ねえ、男の人ってこれが大きくなるんでしょ？」「や、やめ……」

恐怖で小さな声しか出ない。

これが力尽くでレイプされる女の子の立場なのかと色葉はようやく思い知った。

「女の子の振りしたって、ここは正直だっけ教えてあげるよ！」

恐怖に駆られながらも、本能のまま色葉のペニスは勃起してしまう。

やがて、少女達の前で恥ずかしげも無く色葉は射精してしまった。

傷心して帰宅した色葉を待っていたのは優理だった。

「学校でいじめられてるの？」

服装の乱れを敏感に感じ取った優理の言葉に色葉は驚いた。

「べ、別に……」

「嘘言いなさい。お姉ちゃんは何でも知ってるんだから」

抱きしめられた色葉は不思議な感覚に陥った。

驚いた事に性的な興奮は生じない。それよりこんな自分に優しくしてくれる優理に対して、ひたすらに安心感を感じていた。





「お…ほ…あたし…やっぱり女の子に見えないのかなあ」
俺、僕と言おうとして、自分の事を『あたし』と表現して色葉は言った。
「誰かにそんな風に言われたのね。可哀想に」
優理はあくまでも色葉を肯定してくれる。
「大丈夫よ、色葉はどこから見ても可愛い女の子だから。可愛い私の妹だから」
「お姉ちゃん！ あんなに恥ずかしかった言葉が自然に口をついた。」
「お姉ちゃんって思ってくれるのね」 優理の方も破顔して、色葉に語りかける。
「じゃあ、お姉ちゃんが色葉を女の子に誤ってあげるね」
色葉が小さく頷くと、優理は彼をベッドの上で四つん這いになるように指示した。
そしてスカートを捲ってパンツを下ろすと、彼のアヌスにひやりとした感触が伝わる。
「色葉は女の子なんだから、こっちで感じないとね」
「いやああああん！！」
悲鳴と愉悦の入り交じった色葉の喘ぎ声は一時間あまり続いた。



「今日から寝る時はオムツしようね」
眠る前にそう言った優理の言葉に色葉は唖然とした。
「オ、オムツ!? あの赤ちゃんがする!?!」
「そう、オネシヨしちゃう色葉は赤ちゃんと同じでしょ」
そう言われると返す言葉も無かった。毎日ベッドを汚しては雛子にも
迷惑を掛けてしまう。
「で、でも流石にそれは恥ずかしい……」
「何言ってるの。成人男性なのに、女児服で△学校通ってる癖に」
改めて事実を指摘されて色葉は真っ赤になる。
「ほら、お姉ちゃんがオムツあててあげるから、ベッドにごろんってしなさい」
そんな風に言われると色葉はもう抵抗出来なかった。

「やっぱりオムツ使っちゃったね」

「ごめんなさい……」

「いいよ、そのためのオムツなんだから」

翌朝、オネシヨを吸ってすっかりと膨れあがったオムツをあてたまま色葉は恥辱に塗れていた。

「でも、こう毎日じゃ困るわねえ。色葉、四年生のお姉さんっていう自覚はあるの？」

「あ、あるよ！」

思わずそう答えて色葉は更に赤面する。

本当は成人である自分が四年生の自覚があるだなんて滑稽にも程がある。

「お姉ちゃん信じられないわ。自覚が足りない色葉にはもう少し厳しくした方がいのかしら」

少し考えてから、優理は色葉に自分の膝の上うつ伏せになるように指示した。

「な、何をするの……」

不安に駆られる色葉のお尻に優理の平手打ちが飛ぶ。

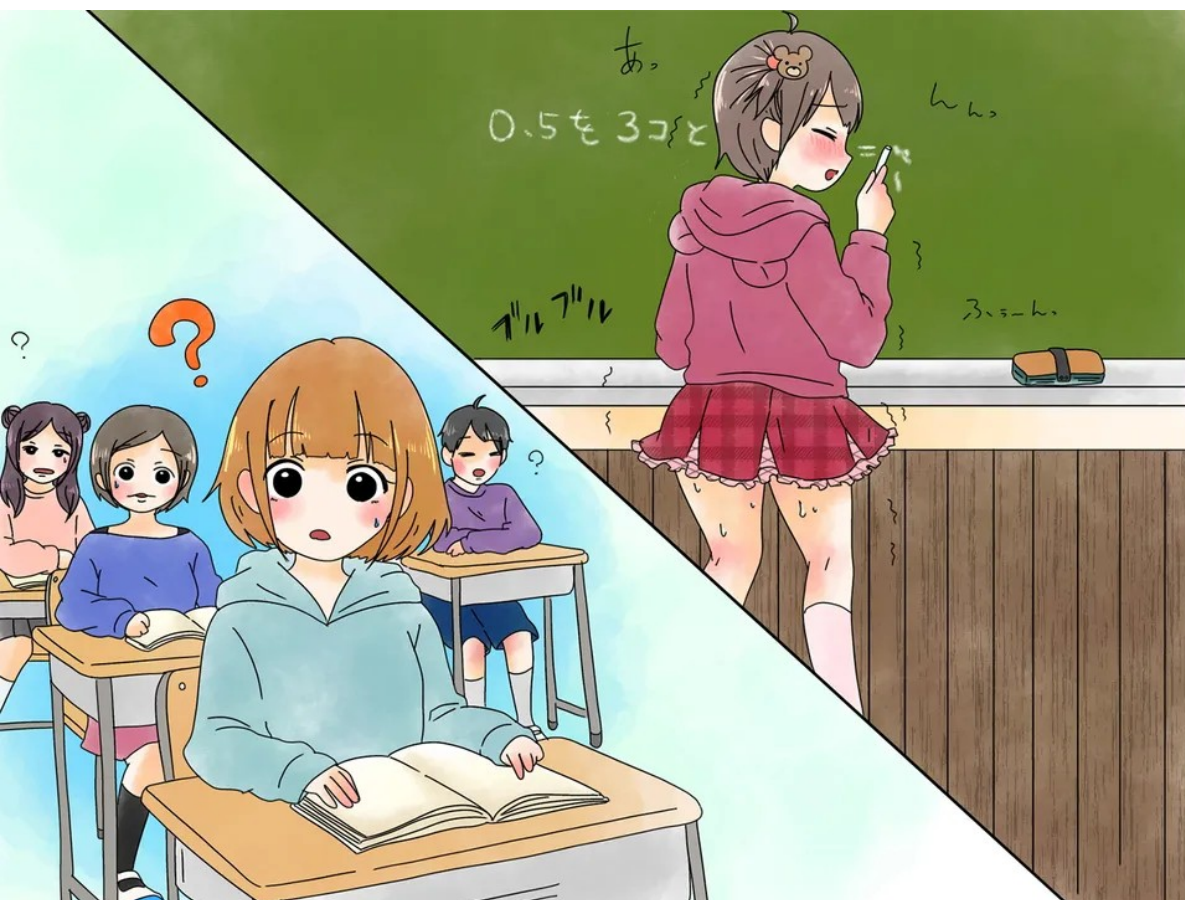


ごめんなさい!

はちんっ

はちんっ

もうオネシヨしないからあっ!



その日から色葉はアナルパイプを挿入させたまま登校させられた。なんでも「お姉ちゃんを受け入れられるようにする為のくんれん」らしい。

パイプは不定期に作動して、登校中であれ、授業中であれ不意に色葉のお尻を感じさせる。

ただでさえ屈辱に塗れた学校生活は色葉にとって更に恥ずかしいものになった。

二十四時間挿入されているアナルバイブのサイズが大になって数日後、いつものように先に眠らされている色葉のベッドに優理が夜這いに訪れた。「覚悟はできてるよね」

「ま、まだ少し……」

「本当の女の子にしてあげるからね」

色葉のお尻に硬い感触が触れる。

優理の股間に付けられたペニスバンドである事は明白だった。

「力を抜いて、優しくしてあげるからね」

「うん、お姉ちゃん……」

こうして色葉は処女を喪失した。



べっぴん色葉、気持ちいいっ!?

うん、うん!
お姉ちゃんのがあたしの中に入ってる!



「最近色葉ちゃん、変わったよね」

「うん、なんだか女の子らしくなったっていうか……」

同級生にそう言われて、色葉は満更でも無かった。

「そ、そう?」

以前の自分なら絶望にでも感じた言葉が今は嬉しくて仕方無い。だが、身も心も少女に変わっていく自分に色葉は戸惑いもあった。

「最近、お前生意気だよな」
しばらく大人しくしていた、いじめっ子グループに声を掛けられて色葉は狼狽した。
「そ、そんな事……」
「すっかりとクラスに溶け込んだみたいだけど、私達はあることを認めてないからね！」
「もう一回教育してあげないといけないのかな」
もはや色葉は少女達がかなり年下だなどと思えなかった。
そこにいるのはただ自分を害しようとする、レイプしようとする恐怖の存在だった。
「あんたを男だっと思ってたのが失敗だったわ」
スカートを捲った少女の股間には優理の物とは比べものにならないイボイボのついた
巨大なペニスバンドが装着されていた。
「しゃぶりなさい。そうしないと痛いわよ」少女は色葉に冷たくそう言った。

年上のお兄さんに、
ちんちん舐めさせるの気持ちいいっ！

ほら、もっと丁寧に
奥までしゃぶりなさい

男の癖に、小さい女の子の服着て、
女の子のおちんちん
舐めさせられるのってどんな気持ち？





「もういいわ、お尻出さない」「そ、それだけは！」
「いいからケツ出せて。でないとお前に乱暴されたって先生に言うわよ」
「そ、そんな……」
「そうなたら、あんたは刑務所行きなんですよ」
「ほら、自分の立場が理解できたんなら、自分からお願いできるよね」
「……して下さい」「んんっ？ 聞こえない」「おかして……下さい……」
「誠意が足りないんじゃない。本当にあたし達に犯して欲しいのお？」
「ほらほら、刑務所行きたいの!？」
「す、すいません！ それだけはっ！」
色葉は少女達の前で土下座して懇願した。



「そんなにお願いされたら仕方ないよねえ」
少女は色葉を押し倒すと、乱暴にスカートを捲ってパンツを
ずり下ろす。
色葉は恐怖で動く事もできなかった。
「おら、お望みのものを挿れてあげるわ!」
前戯も無く挿入されて色葉は悶絶する。
「痛いよおっ! 抜いてえっ!」
優理とは違い、愛も無くひたすら乱暴に出し入れされる
ペニスバンドは色葉にただひたすら痛みのみを与えた。



色葉の意識が途絶えかけた時遠くから声が聞こえた。

「あんた達！ 何してるのっ！」

「えっ？ えっ？ 虹崎先輩っ!？」

「こ、これは……その……」

「色葉のお尻は私のものよ！」

優理は少女からペニスバンドをはぎ取ると、自分で装着してみせた。

「さあ、お仕置き時間よ。順番に並びなさい」

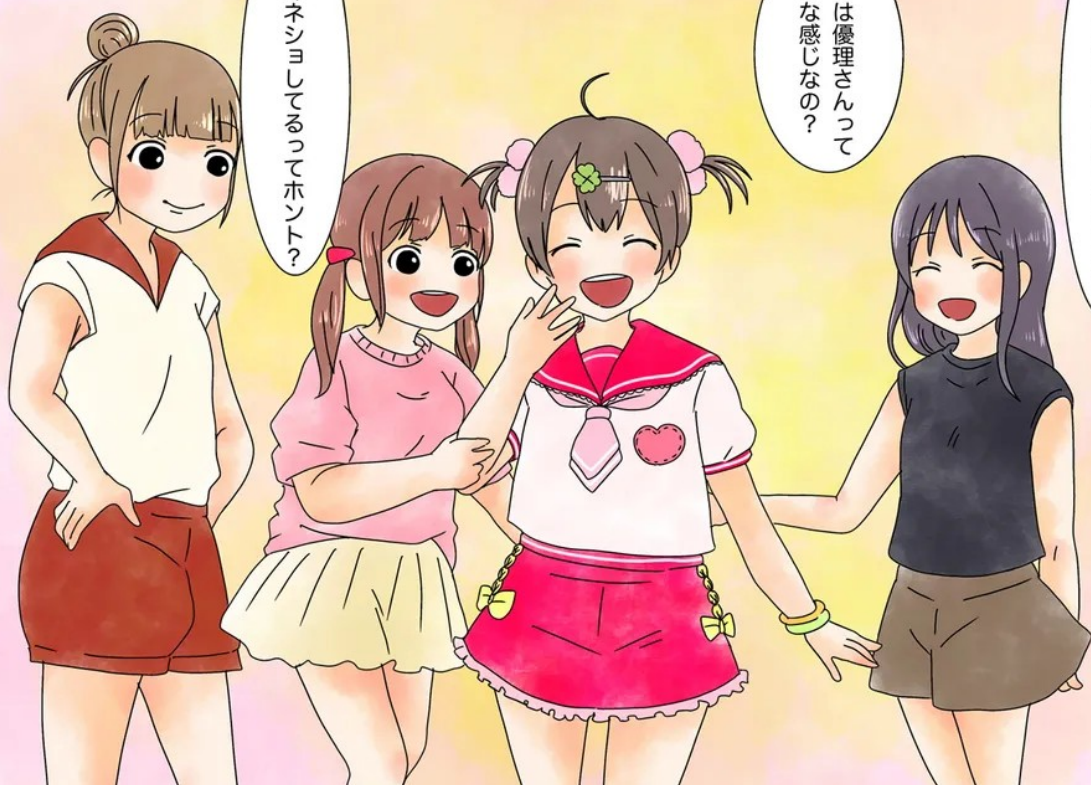
蒼白になるいじめっ子達を見ながら、色葉は気絶してしまっていた。

「こ、この前はごめんな」
「良かったら、友達になってくれるかな」
翌日、すっかりと改心させられたいじめっ子たちはそう言って
色葉の親友になった。

今度、一緒にブラ買いに行こう

家では優理さんって
どんな感じなの？

今でもオネシヨしてるってホント？



そんな事件の後、色葉はすっかりと身も心も女の子になつてしまった。

優理は双頭のデイルドーを用意して、毎夜色葉と共に姉妹愛を確かめ合った。

それは歪んだ形だったが、色葉が生まれて初めて感じる家族との暮らしだった。

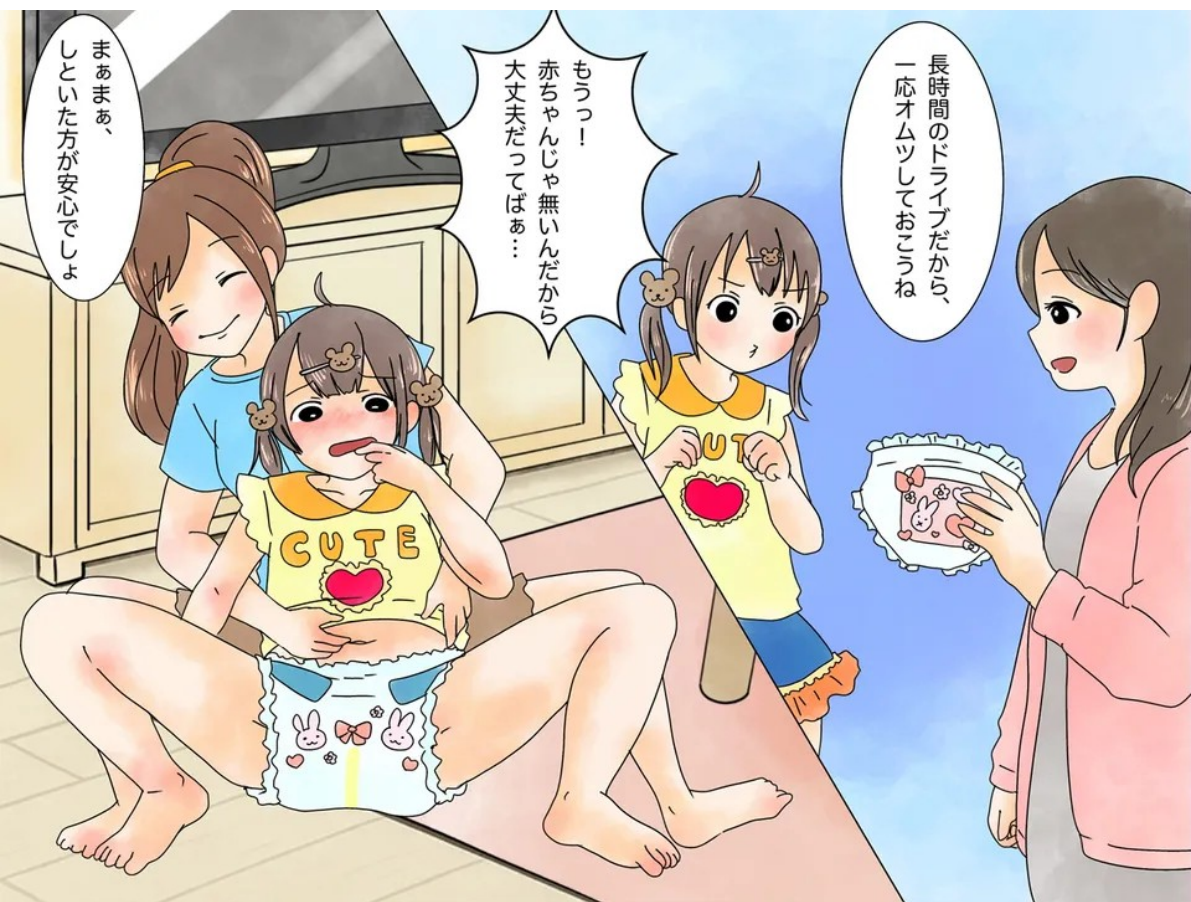
これならお姉ちゃんもきもちよくなるね。どう？私のおちんちん挿れられてみたいでしょ

生意気言っわねえ、ほら、お姉ちゃんのおちんちん味わいなさい！

妹の癖に偉そうにした罰よ。ほら、子宮の中ぐりぐりしてあげる

やだやだあ！奥まで入っちゃう！





まあまあ、
しといた方が安心でしょ

もっっ！
赤ちゃんじゃ無いんだから
大丈夫だってばあ：

長時間のドライブだから、
一応オムツしておこうね

一年が立ち、色葉は五年生に進級した。
彼が家族になった記念日に雛子は家族旅行を計画した。
経験した事のないイベントに色葉は色めき立ったが、
昼間のオムツを雛子に提案され、一抹の不安がよぎった。



「ねえ、まだ着かないの？」
「もうちよつとだから我慢しなさい」
しかし結局渋滞に巻き込まれ、結局色葉はオムツを
使ってしまった。
初めての意識がある中でのお漏らしは、色葉を恥辱に
塗れさせた。



やっとサーブیسエリアに着き、色葉はそこでオムツを交換された。

今までこれ以上ないくらいの恥辱を味わってきた色葉だったが、外でオムツを交換されるのは言葉に言い表せられないくらいの恥ずかしさだった。

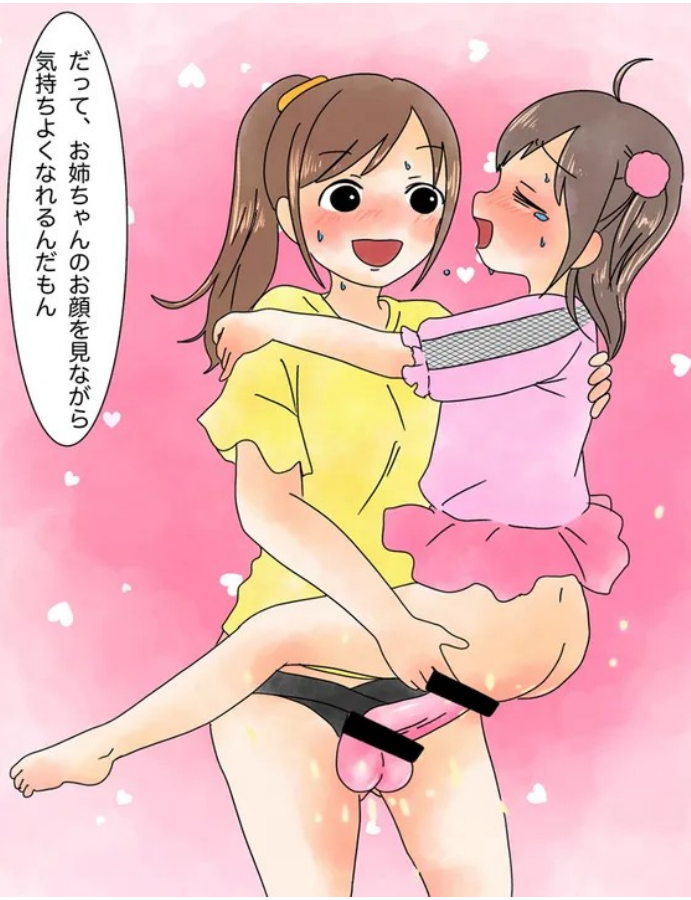
お外でオムツまで交換された色葉は、すっかりと
優理を保護者として認識するようになり、
その依存度は益々高まっていた。

帰宅後、優理と交わった色葉は、旅行での恥ずかしさを
思い出して、今までで一番感じてしまった。

色葉はこの体位が大好きなのね

あっ！お姉ちゃんのが奥まで届いてるっ！！

色葉っ！色葉の締め付けを感じるよっ！



だって、お姉ちゃんのお顔を見ながら
気持ちよくなれるんだもん

可愛いこと言っわね。
ほらほら、妊娠させてあげようかあ



そしてあっという間に三年が立ち、色葉は形式上は『釈放』される事になった。

「これからどうするの色葉ちゃん。いや、西野さん」

「そんな名前で呼ばないで、あたしはもう虹崎色葉だから。」

西崎優理お姉ちゃんの妹の色葉だから」

「ありがとう！ 大好きよ色葉！」

「あたしもだよ、お姉ちゃん！」

こうして色葉はそのまま虹崎家の次女として、□学校に進学する事になった。

憧れの制服に身を包み、今でも時々恥ずかしい事はあるが、自分の選択は

間違っていなかったと、色葉はずっと思い続けられる自信があった。